チャンドラキールティの vyavahāra

那須真裕美

I はじめに vyavahāra という語は、チャンドラキールティ (Candrakīrti 600-650) の著作である PR, ŚSV の記述¹⁾ から、世俗 (saṃvṛti)・言語協約 (sanketa) とシノニムであると解釈される。また vyavahāra としての諦である vyavahārasatya という合成語に関しては、MABh, PR, ŚSV に複数例が見受けられる²⁾。チャンドラキールティは考察 (vicāra) することによって勝義へ志向する³⁾ が、本稿ではその考察の対象となるものが vyavahārasatya であると考えられる。

II vyavahārasatya の要素 チャンドラキールティの vyavahārasatya は、どのような性質を持つのか。MABh6:80 釈には、

言語慣用の諦 (vyavahārasatya) のみに住して勝義が説示され、勝義の教説を理解することによって、また勝義を証得する。以下のように [中] 論 [第24章10偈] に「言語慣用に依らずに勝義は説示されない。勝義の説示せずに涅槃は証得されない」とお説きになる。この中で、勝義の説示は方便所生であり、果であるものである。即ち [勝義の説示 (= 言語慣用の諦) は] 方便所生であり、果であり、証得されるべきものであり、考察されるべきものである⁴⁾。

と説かれ、①方便所生のもの、②果であるもの、③証得されるべきもの、④考察されるべきもの、という4つの要素が示されている。

また ŚSV や MABh には、世間の人々に諦と認められたものである、lokavyavahārasatya という合成語も見られる⁵⁾。しかし、lokavyavahārasatya は考察すべき対象ではなく、vyavahārasatya とは異なるものを意味する。

III vyavahārasatya と考察 (vicāra) の関係 チャンドラキールティの著作において、考察 (vicāra) は勝義を証得することを意図する文脈に現れる⁶⁾。また PR3:4 釈では、

それ故に、もし言語慣用の諦 (vyavahārasatya) であるならば、もののみのように作用もまた認められなくてはならない。もし、真実の考察 (tattva-cintā) を為すならば、その場合、作用という観点から、もののみも存在しないと貴方は認めるべきである⁷⁾。

と説かれる。この記述から、vyavahārasatya は考察が加えられる場合には、勝義へ

志向することが出来るものだと考えられる。即ち、チャンドラキールティは「vyavahārasatya に対する考察 (vicāra)」という機能を通じて、勝義を証得する方法としたと言える。

一方 ŚSV によれば、チャンドラキールティの samvṛtisatya は、vyavahārasatya と異なった要素を持つと考えられる。

まず、或る者にとってこれは世俗 [諦] であると言われるもの、それはその者にとっては真実のものではない。世間の人々によって理解されるものだからである。その対象に対して考察をする必要はない。世間の言語慣用において諦であるものとして認められるものは、また聖者の世間世俗諦として認められる⁸⁾。

この様に samvṛtisatya は、①考察する必要がないもの、②世間の言語慣用の諦 (loka-vyavahārasatya) であるもの、という性質が考えられる。また、

[何故二諦を説くのかと言えば] それ故に世俗諦であるものは、勝義諦に入るべき方便であるからである。[世俗諦は] 自と他からの生起が考察されない場合、世間的な知識 (laukikamati) [・世間的な言説 (laukikavyavahāra)] として認められる⁹⁾。

と MABh6:35 釈に説かれる。samvṛtisatya は勝義を証得する為の方便であるが、考察が加えられない限りは lokavyavahāra である。次に掲げる ŚSV の記述に見るように、lokavyavahāra は勝義を証得する為の考察の対象ではない。つまり、samvṛtisatya 自身では考察の対象にはならないのである¹⁰⁾。

世間の人々の言語慣用 (lokavyavahāra) を考察する場合、[世間の人々の言語慣用においては] 正しい事柄 (=勝義) が成立しないから、聖者によって世間の人々の言語慣用が世俗と言われる¹¹⁾。

これらの資料より、vyavahārasatya が考察されるべきものであるのに対して、samvṛtisatya 自身は勝義へ志向する手段ではないと言える。通常 vyavahārasatya と samvṛtisatya は同様のものとして扱われるが、考察 (vicāra) の対象であるか否かという点では異なるものである。

IV チャンドラキールティの「勝義へ志向させる方法」 チャンドラキールティは、勝義を証得する為に vyavahārasatya を考察する方法を採った。しかし、PR1:1 等で、パーヴィヴェーカが限定辞「勝義という観点から」(paramārthataḥ) を用いることを批判している。この限定辞は、協約的勝義諦 (*sāṅketika-paramārthasatya) と呼ばれる、勝義を証得する為に設定したものである。また、パーヴィヴェーカの協約的勝義諦は、勝義的勝義諦 (*pāṇamarthika-paramārthasatya) に基づいて設定された、向下的なものである¹²⁾。

これに対して、チャンドラキールティの採用した方法は、否定媒介である vyavahārasatya を用いるという向上的なものである。この両者の方法論には、機能的な差はあるが、協約的勝義諦と vyavahārasatya という媒介的役割を担うものを設定する構造という点で、類似していると考えられる。

V 結語 vyavahārasatya とは、勝義の説示に用いられる、考察されるべきものである。samvṛti と vyavahāra という語自身はシノニムであるが、samvṛtisatya と vyavahārasatya は同一のものではない。samvṛtisatya 自身は勝義へ志向させる手段ではないのに対して、vyavahārasatya は考察という機能に結び付くことによって、勝義へ志向させる手段となるものである。

また、バーヴィヴェーカが協約的勝義諦によって勝義へ志向する手段とするのと同様、チャンドラキールティは vyavahārasatya を考察することによって、勝義へ志向させる手段とするのである。

-
- 1) PR (Poussin p.492 ll. 10-13), ŚSV (Erb p.212 l.40-p.213 l.4) 2) MABh に 7 回, PR に 3 回, SSV に 1 回出る (岸根敏幸「samvṛtisatya と vyavahārasatya」『仏印研』42-1) と指摘されるが, PR には更に 1 例 (p.356 l.2) がある。また、この語はバーヴィヴェーカの著作中では、Prajñāpradīpa 18; 8a 釈に 1 度の用例が認められるに過ぎない 3) 江島恵教「中観学派における対論の意義」『仏教思想史』3 pp.168-173 4) Poussin p.178 ll.8-15. 小川氏は、ジャヤーナンダ註 (P No.5271 241a ll.2-4) に基づき「方便所生のもの」は勝義と解する (『空性思想の研究』p.201)。だが、チャンドラキールティの想定する勝義諦は「言語を超越したもの」(ex. PR18:9) であり、また Poussin 訳に従って、本稿では「方便所生のもの」は勝義の説示、即ち vyavahārasatya であると解釈する。5) ŚSV (Erb p.213 ll.20-24), MABh6; 35 (Poussin p.121 ll.5-17) 6) 他にも vi-√car の派生形や cintā 等が, PR p.21 ll.4-5, PR p.172 ll.12-14 等に見られる。7) Poussin p.121 ll.5-8. 8) Erb p.212 ll.30-33. 9) Poussin p.116 ll.6-9. 括弧内、ツォンカパ註より補い 10) Poussin p.120 ll.1-4 11) 岸根氏は「samvṛtisatya を考察すれば vyavahārasatya になる」と解釈する (前掲論文 p.90) が、これを積極的に指摘する記述は見られない 12) Erb p.212 ll.37-39, 斎藤 明『『空七十論註』における Candrakīrti の二諦解釈』『仏印研』29-2 参照。13) Prajñāpradīpa-ṭīkā24:10

PR *Prasannapadā* Poussin ed. *Mūlamādhyamakakārikās de Nāgārjuna*, 1970

MABh *Madhyamakāvatāra-bhāṣya* Poussin ed. *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, 1970

ŚSV *Śūnyatāsaptati-vṛtti* Erb ed. *Śūnyatāsaptativṛtti*, Tibetan and Indo-Tibetan studies6,1997

〈キーワード〉 チャンドラキールティ, vyavahāra, 二諦説

(龍谷大学大学院)